

不可解な日本の対露外交

漢和防務評論 20140730（抄訳）

平可夫

阿部信行

（訳者コメント）

ウクライナ問題をめぐる日本の外交を批判した平可夫氏のの記事を紹介しします。賛否は抜きにして、このように考える国際軍事評論家もいる、という程度で興味のある方はこの記事をお読みいただきたいと思います。

同氏は、今後の世界は新帝国主義の時代になると述べています。安倍首相の目指す日本もその一局であると。

記事の中にロシアの作曲家チャイコフスキーのバイオリン協奏曲ニ長調が出てきました。聴いたことのあるポピュラーな曲ですが、同氏の解説があり改めて聴きました。

日本の対露外交の“核心利益”は何なのか？当然それは北方四島の返還であろう。日本から遠く離れたクリミアの問題は、日本にとって“一般利益”であるに過ぎない。奇怪なことに日本は、クリミア問題で米国の“制裁”に追随し、モスクワの政治観察家の評価を下げてしまった。東京はなぜこのように動いたのか？モスクワは理解できない！本誌も理解できない！

日本の外務省は、クリミアが中国海軍の武装を強化した張本人であることを知っているのだろうか？過去 20 年、クリミアは中国に何を提供したか？SAKI 市にある唯一の SU-33 艦載機は中国に売却されたのだ。中国はこれを基礎にクローンの J-15 型艦載機を作った。空母“遼寧”の動力系統はボイラーと蒸気タービンで構成されているが、いずれもクリミアで設計されたものだ。（漢和 4 月号参照）またクリミアは、中国海軍のために世界最大の ZUBR 型エアクッション艇を 2 艘生産した。将来中国海軍が日中間で争議のある島嶼に上陸作戦を行う場合、この ZUBR 型エアクッション艇を率先して使用する可能性が高い。さらにクリミアは、このエアクッション艇の生産技術を全て中国に提供した。しかしロシアは、ウクライナがロシアの知的財産権を侵害したと主張し、最初からこの輸出に反対した。ZUBR 輸出事件を契機として、2009 年前後に、ウクライナとロシアは、「旧ソ連時代に設計された武器の知的財産権保護に関する協議」を締結した。衆知の通り ZUBR は、ロシアの ALMAZ 設計局が設計したものである。

現在、西側を見ると、クリミア・ウクライナ問題でロシアと実質的に対立している国は、EU 及び米国である。第一の対立は宗教観である。

帝政以来、ロシアの一部知識分子は常に欧州に融合することを理想としていた。

この考え方はピョートル大帝、エカチェリーナ女帝からエリツイン時代まで続き、一定の思想の基礎を築いた。しかし欧州は、従来からロシアの考えを受け入れることはなかった。1995 年、NATO 結成 50 周年式典時、本誌記者は NATO の首席軍事スポークスマン（ドイツ国籍）に質問した。

KDR 記者：今回のワシントン会議ではウクライナが NATO 加盟を希望しているとの声がある。もしロシアが NATO 加盟を希望したら、NATO は如何に対処するか？

NATO スポークスマン：ロシアは欧州国家なのであるだろうか？

KDR 記者：トルコは欧州国家なのか？

NATO スポークスマン：状況が全く異なる。トルコはすでに NATO の忠実な同盟国である。NATO 憲章には、欧州国家のみが加盟できるとある。

（KDR 記者：これは明確に論理に反する。トルコの欧州領土はレニングラードに及ばない）

芸術領域において、筆者はロシアの油絵が好きだが、カナダの画廊でロシアの油絵が売られていない事情について聞いた際、画廊側は：我々は欧州の油絵は保有しているがロシアの油絵は売っていない、と答えた。

筆者：ロシアの油絵は欧州の油絵とは違うのか？

欧州が受け入れているロシアの芸術は、チャイコフスキーのように音楽に限られているようだ。チャイコフスキーの作品でさえも、当初欧州では偏見を持たれていた。二長調バイオリン協奏曲がウィーンで初めて演奏されたとき、当地の音楽評論家は：最初はバイオリンのような音楽だが、後になるにしたがって野蛮になる、と評価した。当時チャイコフスキーは、スイスでこの作品を書いた。彼は自己の作品に対する他人の評価を極めて重視していたので、このような評価に悩んでいた。したがって彼はバイオリン協奏曲だけしか作曲しなかった。筆者は次のように考える：欧州が若干のロシア作曲家の作品を受け入れる理由は、それらが西欧で作曲されたからである。なぜ欧州人はロシア人の作品をすべて異様に処遇するのだろうか？その上なぜ”野蛮”の標識を付けるのであろうか？周知の通り、欧米で生活する者はキリストの承認が必要だ。現在まで、米国を含めた欧州は、宗教の色彩が極めて濃く、外交にも内政にも強い影響を与えている。米国大統領の重要演説では、必ず最後に”米国に神の御加護がありますように”（GOD BLESS AMERICA）との言葉を加える。

長い時代の交流切磋を経て、現在はキリスト教、天主教（ローマ・カトリック教）は、一部儀礼上の問題で不一致点はあるものの、双方が相手の文明を承認するようになった。この点は、欧米団結の重要な精神的支柱となっており、ローマ・ラテン系列の天主教も新教徒を主とする北米キリスト教も”キリスト教共同体”の一員となった。これが EU（欧州共同体）を建設する思想の基礎とな

っている。この基礎は、キリスト教の”一神論”、古代ギリシャ哲学及びローマ法を核心としている。特にローマ法は、キリスト教共同体の普遍的価値観である。しかしながら東正教（ギリシャ正教）は、ローマ法を認めていない。今日ローマ法のロシアの社会、法典及び文化に対する影響力は小さい。これが、”キリスト教共同体”がロシアを”自己人（親しい間柄）”として承認しない理由の根源である。言い換えれば、東正教は、欧米のキリスト教及びローマ天主教から見れば依然異教である。

プーチンのクリミア問題に関する演説や欧米との摩擦をもたらした演説を詳細に読むと、プーチンの不満は：米国大統領が自らを”神の寵児”或いは”神の選民”であると認識していることにある。プーチンはなぜ何度も”寵児””選民”の認識問題を強調するのか？それはロシアが承服できないからである。ロシアも自ら”神の選民”或いは世界の”救世主”としての責務を感じている。したがって国際政治から見ると、21世紀、米露の間では、誰が”神の選民”であるかを巡って争いが絶えることはなく、新たな地縁政治の枠組みが形成されるであろう。米露の二者は依然としてしっくりせず、対立のシンボルが、かつての共産主義社会主義思想から、今日はロシアの伝統である東正教に変わっただけである。中国及び日本の国際政治学者のなかで、神学、宗教及び芸術的価値観から今日の東西関係の対立を捉える人は極めて少ない。特に中国では、”外から見える世界”すなわち金銭（市場）或いは戦略摩擦の面だけに注目している。カナダでは、ほぼ全ての総合大学に神学部があるが、中国はそうではない。

新帝国主義集団の形成

なぜプーチンは、クリミア問題で（コソボ紛争当時よりも）大胆にコミットしたのか？効果があつたのか？ロシアは、すでに総合力が強大になり、逐次中国や安倍の日本と同様に、新たな帝国主義（社会帝国主義）の大道に向かって歩んでいる。本誌は従来から帝国主義を批判してはいない。成熟した帝国主義は世界平和に資すると考えているからだ。今日の帝国主義はもはや植民地争奪戦など出来るはずはなく、熱核兵器が発明されたため、帝国主義はますます聡明になっている。当然、新旧帝国主義も、社会帝国主義も外部市場に依存し、或いは輸出に依存し、過剰な自己資本は、対外投資の増大を招くという特徴は同じである。したがって新帝国主義は、自己の”商品市場の地盤（陣営）”（輸出入を含む）及び金融地盤等を確保しなければならない。歴史はまた、第一次世界大戦前期の帝国主義陣営化の時代に戻る。しかし、今日の帝国主義は、大規模殺戮の火砲に代わり、商品及び金融のトップが協議によって世界市場を争奪するのが特徴である。TPP とは、日米が中国の経済帝国主義に対抗するため新たな陣営である。ロシアはどうするのか？

プーチンの時代になってから、自らの位置づけを”欧亜地縁”(EURO-ASIA)の主体と認定した。すなわちロシアは、欧州にもアジアにも属さない自ら 1 極を占める国家となるのである。このため経済政策では、逐次ロシア、カザフスタン、白ロシアを主とする関税同盟を形成する。ロシアは EU には加盟しない。さらに中華経済圏にも加入しない。これは宿命でもある。

新帝国主義形成の為には、当然各陣営間に緩衝地帯を設ける必要がある。これがロシアがウクライナを高度に重視する理由である。なぜ中国は、歴史上かつてない程、近海、南シナ海、北朝鮮、蒙古等の緩衝地帯を重視するのか？その理由は、再び帝国主義国家を目指しているからである。

この点を理解すれば次のことが分かる：ウクライナはロシアが放棄できない緩衝地帯である。一旦ウクライナが NATO に加盟すれば、ロシアは必ず出兵する。この点は疑いが無い。なぜ？その理由は、ロシアはこれ以上退くことが出来ないからである。ロシア帝国の領土は、ソ連時代、ツァーリ帝国時代当時に比べかなり小さくなっている。帝国は大きくなるにしたがって緩衝地帯も外側に延伸するが当然妥協も必要になる。したがってソ連時代、東欧集団だけでなく、フィンランド、オーストリアもソ連が希望する緩衝地帯に属していた。これが戦略空間である。その後、ソ連の戦略空間はつぎつぎ圧縮された。キエフからロシアの心臓部であるモスクワまでの距離を考えてみるが良い。当時、スターリンがキエフを失ったことでなぜ浮足立ったかが分かる。

日本外交に話を戻す。ロシアは西側に再び無視された後、EURO-ASIA の国策をもって ASIA に向って移動を開始する。これは初めてではない。本来プーチンは日本に好感を持っている。中国は嫌っている。(クレムリンの消息筋は、筆者に興味ある事件を話してくれた：KGB の教育を受けた人は米国、中国に好感を持たない。いずれも第一の敵国であるからだ。プーチン大統領の第一任期のとき、個人的に中国を話題にしたことはほとんどなかった。ただ 1 回だけ中国に言及したのは、彼が食事のための箸を使用した時だった。箸を発明したのは、中国か？或いは日本か？と彼は質問した。) メドベージェフは KGB 出身ではなく、中国に好感を持っている。現在、ロシアの東方政策には、極東の開発及び北方四島問題解決があり、本来日本にとって大きなチャンスであるはずだ。しかもクリミア問題の激化によって再び脚光を浴びている。しかし残念ながら日本の対外政策は、この点を見逃した。それどころか欧米の”キリスト教共同体”に加入し、彼らと共同して東正教のロシアを再び異教徒とした。いかなる追加制裁を加えるつもりなのか？

安倍首相は、対露政策を決定する前にチャイコフスキーの二長調バイオリン協奏曲を真剣に聞く必要がある。この曲は弾くのが難しい。第一楽章は彼が泣きながら自ら訴えているようだ。実際はロシアのくやしき、悲哀を訴えている。

以上